

## 論文の内容の要旨

### 論文題目

フラッシュモブズ  
儀礼と運動の交わる場所

### 氏名

東京大学大学院 学際情報学府 博士課程  
文化・人間情報学コース  
平成 20 年 3 月 単位取得退学  
学生証番号 37103  
伊藤昌亮

「フラッシュモブ」とは以下のように定義される活動である。

インターネットや携帯電話を通じて呼びかけられた見ず知らずの人々が公共の場に集まり、わけのわからないことをしてかしてからすぐにまた散り散りになること（『コンサイス・オックスフォード英語辞典』第 11 版）。

21 世紀の幕開けとともに世界各地の都市からほぼ同時発生的に立ち現れ、今や世界中のいたるところに浸透するまでになったこの活動は、一見する限りではひたすらバカバカしく、くだらなく、わけのわからないものである。しかし現代社会の文化状況、いわば「デモとテロの時代」の不安定な地勢の中にそれを置いてみれば、そこに込められているいわばその「無意味さの意味」「無目的さの目的」がまざまざと浮かび上がってくるのではなかろうか。

本論文の目的は、「フラッシュモブ」という独自の様式の集合行動に込められているその「無意味さの意味」「無目的さの目的」を探ることである。そうすることによってさらに現代社会の文化状況の布置をその深層の次元で探ることを、特にそこに埋め込まれているものとしての新たな文化の布置、すなわち新たな「デモの文化」と「テロの文化」との成り立ちと構成をその基層の次元で探ることを試みる。

まず第1章ではいわゆる「フラッシュモブ現象」の発生と形成、さらにその発展と普及の過程を綿密に記述・検証することを試みる。世界中の人々をまたたくまに熱狂の渦中に巻き込むこととなったその不可思議な魅力をできる限り生き生きと伝えるためにここではそうした経緯をいわば物語風に、つまり世界中の「プランクスター」（いたずら者）による奇想天外な発想と冒険の物語として、同時に一つの風変わりな社会現象の発生と発展の物語として書き記すことを試みる。

そのために特に取り上げてみたいのは「フラッシュモブ現象」のいわば「正史」に当たるもの、つまりワジクの活動の流れを汲むものとしてのいわば正統的な「フラッシュモブ」の歴史である。「世界初のフラッシュモブ」として公式に広く認められているニューヨークでのイベントを起点に「フラッシュモブ」なる語が生まれ、そこから「フラッシュモブ現象」が世界中に燃え広がっていくこととなる経緯をここではできる限り丹念かつ仔細に、当時の熱狂の風景を呼び起こしながら書き記してみたい。

「フラッシュモブ」という独自の様式の集合行動に込められているその「無意味さの意味」「無目的さの目的」を探るためには、ではどのような理論枠組みが必要とされるであろうか。いいかえればどのような理論枠組みの中で捉えれば、「フラッシュモブ」という独自の様式の集合行動を通じて人々が意味のないことをすることの意味、目的のないことをすることの目的を浮かび上がらせることが可能となるであろうか。次に第2章ではそのための理論枠組みを構成・構築することを試みる。

そのための出発点としてまず検討してみたいのは、人間の集合行動のあり方を多角的・総合的に考察することを目指して20世紀初頭のアメリカで構想された議論、「集合行動論」である。その特徴と限界を明らかにしたうえで次にそれを乗り越えるための方向性を、より複雑かつ深遠な見方からやはり同時期のヨーロッパで展開された議論、「集合的沸騰」をめぐるデュルケムの議論の中に探りつつ、さらにそこから展望されるべき新たな理論的展開に向けてその土台となろうものをここでは、「儀礼的パフォーマンス」をめぐる議論、および「新しい新しい社会運動」をめぐる議論として描き出してみたい。

その後、以下の章ではこれらの議論のアプローチに沿って、すなわち「儀礼的パフォーマンス」をめぐる議論、および「新しい新しい社会運動」をめぐる議論の理論枠組みの中で「フラッシュモブ」という集合行動のいくつかの事例を分析・考察することを試みる。

そのために特に取り上げてみたいのは「フラッシュモブ現象」のいわば「前史」に当たるもの、その多彩な歴史の中でも最も先行的かつ先鋭的な、最も野心的かつ実験的な活動として位置づけられようもの、「2ちゃんねるオフ」である。いわば「早すぎた、そして濃すぎたフラッシュモブ」としての「2ちゃんねるオフ」の中にはその後の「フラッシュモブ現象」に通底するものとしての独特な発想と志向、そして独自の問題意識が先行的かつ先鋭的なかたちで、しかも濃密に込められていたと考えられるからである。そこでその定番的なレパートリの中から二つの著名なものを取り上げ、それらをそれぞれ「儀礼的パフォーマンス」の、および「新しい新しい社会運動」の一つの事例として分析・考察するこ

とを試みる。

最初に取り上げるのは「2ちゃんねるオフ」のかつての定番的なレパートリの中でも最も広く知られている古典的なものの一つ、しかも特に集団儀礼としての性格を強く持つと考えられるもの、「吉野家祭り」である。第2章で提示した理論枠組みの中から第3章では特に「儀礼的パフォーマンス」をめぐる議論に基づき、「吉野家祭り」における「2ちゃんねらー」の集合行動を「儀礼的パフォーマンス」の一つの事例として分析・考察することを試みる。

次に取り上げるのは「2ちゃんねるオフ」のかつての定番的なレパートリの中でも最も長く続けられてきた継続的なものの一つ、しかも特に社会運動としての性格を強く持つと考えられるもの、「24時間マラソン監視オフ」である。第2章で提示した理論枠組みの中から第4章では特に「新しい新しい社会運動」をめぐる議論に基づき、「24時間マラソン監視オフ」における「2ちゃんねらー」の集合行為を「新しい新しい社会運動」の一つの事例として分析・考察することを試みる。

このように本論文ではさまざまな角度から「フラッシュモブ現象」にアプローチする。いわば「物語記述編」として位置づけられる第1章ではまずその「正史」部分を対象に、「フラッシュモブ現象」そのものの発生と発展の経緯をマクロな視角から、いわばパノラマ的に記述・検証することを試みる。一方で「理論構築編」として位置づけられる第2章では「集合行動論」を出発点に、「フラッシュモブ現象」を捉えるための理論枠組みを統合的・整合的に構成・構築することを試みる。そして「事例分析編」として位置づけられる第3章・第4章では次にその「前史」部分を対象に、「フラッシュモブ現象」を構成するいくつかの事例をミクロな視角から、第2章で提示した理論枠組みの中でいわば顕微鏡的に分析・考察することを試みる。

さらにそれぞれの章の中でもやはりさまざまな角度から「フラッシュモブ現象」にアプローチする。たとえば第2章では理論枠組みを構成・構築するにあたり、人類学・社会学・文芸学などの広範な研究領域からさまざまな理論を幅広く取り上げ、それぞれの流派に捉われることなくそれらを接合することを目指す。あるいは第3章・第4章ではいくつかの事例を分析・考察するにあたり、必要に応じていわゆる量的調査の方法と質的調査の方法とを組み合わせ、それぞれの流儀に捉われることなくそれらを接合することを目指す。

以上のように本論文では特に第2章で提示する議論の理論枠組みに沿って、すなわち「儀礼的パフォーマンス」をめぐる議論、および「新しい新しい社会運動」をめぐる議論の理論枠組みの中でいくつかの事例を分析・考察することによって「フラッシュモブ現象」にアプローチする。いいかえれば本論文の目指すところはこれら二つの議論の理論的射程が重ね合わせられる領域、いわば「儀礼と運動の交わる場所」に、「フラッシュモブ」という集合行動に込められた「無意味さの意味」「無目的さの目的」を探ることである。